音象徴について

——ピュセイ説をめぐって——

日　置　孝次郎

はじめに

音象徴 sound symbolism とは一般に次のように考えられている。言語外的世界の聴覚的あるいは視覚的事象に対して言語的音声を関連づけている現象であると。聴覚的事象に呼応する音声の関連性の場合としては，擬声語（コケコッコー，ワンワン）が挙げられ，視覚的なものとの関連づけとしては擬態語（ピカピカ，ダラダラ…）などが考えられる。音象徴にはまた，いわゆる size symbolism も含まれる。これは，視覚的に大なる対象には開口度の大きい開母音 a，小なるものには開口度の小さい閉母音 i を結びつけようとする現象である。よく例に出されるのがラテン語の m*a*ximum 最大 vs m*i*nimum 最小である。ところがこれに対して，では英語の b*i*g 大きい vs sm*a*ll 小さいはどうだと反論が向けられる。この問題はしかし，当該言語の語彙体系や語史に就いての共時的，通時的レベルにおける研究を踏まえて議論さるべきものであると考える。size symbolism についてはその存在が確認される言語の事例は報告されている。現代の言語学は，音象徴に関しては比較的無関心と言える。善意に解釈して，なすべき重要課題が他に山積しており，そこまでは手が回りかねるという状態におかれているとしよう。この状況が生じた事に強い影響を与えたのは，現代言語学の創始者とみなされる

フェルディナンド・ド・ソシュールと思われる。彼は擬声語についても，数からして僅少であり，言語体系の組織的要素ではないとしてそれ以上は取上げない。確かに共時的には擬声語は固有の形態としてはごく僅かで体系の中の例外的存在に過ぎない。但し，言語構造の本質に議論が及ぶとき，通時的考察は不可避である。共時的に見れば，体系中の例外的存在も通時的に見ると，かつて体系の核心部であった例は多い。例えば，英語の動詞の活用体系中，いわゆる不規則動詞は，時制変化を語根中の母音変化で表わす（sing 歌う，sang 歌った，sung 歌われた）。ところが，次第に数が減じ，僅少になりつつある例外的動詞は，実はゲルマン語における本来的な1次動詞で，母音交替の事象で時制を表わすものであった。そして現在，本来的と考えられている規則動詞は1次動詞やその他の品詞から派生した2次的なものであった。ソシュールによるシニフィアンとシニフィエン間における一切の自然的絆の可能性の否定は，複合語における動機性の容認はあるとしても，徹底的であり[1)]，音象徴を許容する余地はほとんどないといえよう。

本稿では，音象徴の古典的仮説とも言えるプラトンの対話篇クラテュロスのピュセイ説を取上げ，議論の内容確認，次いで心理学による音象徴の実験結果に基くピュセイ説の検証と，更には音象徴の心理実験に用いられた二項対立的メルクマールが民俗に表われる恒常的象徴（二分法的）と同一である点を指摘，心理，言語，民俗，認知の諸分野における音象徴に表われた基本的メルクマールに関しての整合性に基き，ピュセイ説の妥当性を，その不足を補いつつ示そうとするものである。

1. **ピュセイ説**　すでに「はじめに」でも触れた様に，音象徴，すなわち世界の事象と言語音声間の関連の存在を主張する説である。要するに言語は命名する当該事象の存在の本質そのものと関係しているということである。

そこで最初に語源上のテーマが取上げられる。代表的なものを2，3眺めることにする。例えば，海の神の名ポセイドーン poseidōn は posi-desmos（足一枷）という合成語で本来はあった。それが母音，子音の増減の結果，現在の形に融合したと言う。音声上の説明はさておき，問題は「足・枷」と

いう意味が何故，海神ポセイドーンの語源上の意味となりうるかである。解釈の根拠は，海の神にとって，海は歩行を阻害するものであり，海神は丁度足枷をかけられている者と想定されるという点である。poseidōn については別の語源解釈も可能として挙げられており，それに対応する音声変化の説明（但し音声学的には容認し難いものだが）も伴っている。この場合も，海の神の特性として意味論的に許容しうるばかりである（例えば「多くを知っている者」など）[2]。この語源解釈に作用している原理は，海神の有する特性乃至本質の選択には恣意的あるいは索強附会的なものはあるにしろ，観念連合，あるいは連想と呼ばれる，種としての人間のもつ普遍的心理現象で，その意味においては，自然的妥当性を有すると言える[3]。このレベルでは音象徴ではなく，音象徴とは次のレベルの現象についていわれるものである。

それは，絵画では形や色の，音楽では音の模写が行なわれる様に，言語では対象物の本質の模写が行なわれると主張するものである[4]。ここで我々は直ちに擬声語を思い浮べがちだが，実はそれよりも更に深い別のアスペクトが係っているようだ。例えば［r］[5] の音は，発音の際，舌は最もよく動いて休止せず，一番よく振動するから，運動を表わすのに用いられる。rein「流れる」，trómos「慓え」などがその例であるとする。また［l］は舌がよく滑るので，leia「つるつるした」，liparos「油のあるもの」などのようにそれに応ずる意味内容の語に用いられた。一方，歯音の［d］，［t］は舌を抑止，呼気も停止するので，それに対応する意味の表現に使われた。例えば，desmós「束縛」，stásis「停止」などがそれであると[6]。母音の場合は，［i］は「小」[7]［a］は「大」，［ē］は「長い」，また［o］は「丸いもの」を示すと言い，ぞれぞれ mégas「大きい」，mēkos「長さ」，gongylon「丸い」などをその例とする。

以上の様に，特定の子音［r］・［t］がそれぞれ「運動」・「停止」を，あるいは特定の母音［a］・［i］が「大」・「小」を表わすというように，視覚，聴覚の感覚による事象の特性に対応する性質の音声が適用されるというのである。これは，擬声語，あるいはノンバーバル・コミュニケーションの手段として用いられる手振り，身振り同様，模倣といえる。これは，人間の

他の表現活動（芸術，音楽…）の根本原理が模倣であることを考える時，学問を含めおよそ，文化活動（言語習得も含め）一般の基礎には模倣がある事に思いを至す時，首肯しうる。因に日本語の「マナブ」は，「マネブ」（真似る）からの転と言われる。

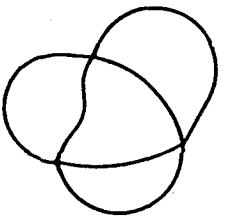
但し，プラトンのこの対話篇で，クラテュロスの主張する音象徴は，ソクラテスにより支持されるが全面的にではなく，最終的には大幅な反論をくうことになる。それは次の理由による。すなわち，音象徴を有するはずの音声を含む語が当然表わすべき意味とは反対の意味を持つという矛盾の例と，音象徴では，本来示しえない概念，たとえば数などを表わす語の存在は，その反証であるとし[8]，これにより，ピュセイ説に対立するテセイ説（契約説）を認めざるをえないだろうとするものである。結局のところ，この相反する両説のいずれにも決定的な軍配は上げられず，哲学上の認識論の問題に戻ることになる。

このピュセイ，テセイを回る論争は，古代ギリシヤ，古代ローマを通じて絶えず繰返されたものだが，現代でも，言語は音象徴に基くか，人間の社会的合意という契約によるのかという議論として続行されている。我々は，次に音象徴を心理学的諸実験から考察することにする。

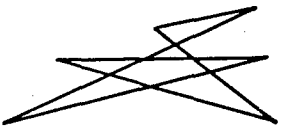
2. 心理学上の実験結果とピュセイ説　まず，次の様な心理テストがある。

図 1.

イ



ロ



上のイ，ロの 2 図形が被験者に見せられ，そして，malume，takete とい

う2種の音声形式を聞かせられ，何れかをイ，ロの図形に結びつけるよう指示される。結果は，圧倒的多数が，malume を円形状のイ，takete をジグザリ即ち角状のロに結びつけた。これは種々の異なる言語使用者に実験して同一の結果が出たとのことである[9]。筆者は，40人程度の学生グループに教室で2回，9，7，3歳の3人の小児に1回同様のテストを試みたが，例外なく上述の心理テストと同じ結果をえた。その際，勿論，日本が人対象であるから，malume が暗示する「マル」という印象を避けるため，meluma, tekuta と修正した。これにより，子音以外の母音は全て等しく，条件は同じとなり，問題となる子音の対立を一尽明瞭にした。

さてこの実験結果は何を物語るのか。それは，視覚的な印象と聴覚的乃至調音器管の綜合的感覚の印象との関連づけを人間は自然に行なおうとする，また特定の視覚的印象に対して，特定の音声で反応しようとする傾向がある事である。問題は如何なる特性が関連づけに関与するかという点である。この言わば命名行為のテストともいうべき上記の実験に用いられた音声は対立する性質のものであり，それは，malume に使われている［m, l］と taketa の［t, k］は，音声学上，前者が sonorant「共鳴音」，後者が obstruent「阻害音」という対立するグループとなっている[10]。この両者を発音の際の呼気という観点から眺める時，次の様に特徴づけられる。

〔表1〕	共鳴音［m, l, n, r…］	阻害音［k, t, p…］
呼気	大	小

共鳴音の発音に際しては呼気が比較的自由に（阻害されず）出るのに反し，阻害音の場合，呼気は完全に一旦停止する。阻害者が，stop「閉鎖音」と呼ばれるのは正にこの性質に基く。呼気の自由と停止は大・小のメルクマールで表わしうる。これは調音の感覚による印象として「自由さ・窮屈さ」としても表わしえよう。そしてそれは聴覚的印象にも当てはまる。これはまた，人は耳に聴いた音を直ちに自から再生すなわち発音しようとするものである事を考えると，聴覚，口腔内感覚の双方により同時に印象づけられると言える

のではないか。

さて，音声的特性の〔大・小〕あるいは〔自由・窮屈〕という二項対立の特性と，イ，ロの図形が与える視覚上の印象との関連は如何に説明さるべきか。イ，ロの図形は，それぞれ○「マル」△「カド」（三角）に還元されるが，視覚上の印象からは次のことが言える。我々は「カド」（三角）の場合は，カドの点を意識するのに反し「マル」（円）の場合は，ある特定の点ではなく，意識されるのは，円全体である。この視覚上の，「マル」からくる「全体」と「カド」からくる「部分」（点）は「大 vs 小」という対立概念に置換えられる。そしてこの「大・小」は，マルい図形から受ける「自由さ，のびやかさ」とカドカドしい図形からの「窮屈さ，閉鎖性」という印象と整合性を有する。従って，音声上の特性と視覚的印象の特性による関連づけは次のようにまとめられる。

〔表２〕

	〔共鳴音〕	〔阻害音〕
呼気/聴覚 発音印象	大／自由	小／窮屈
	‖	‖
視覚印象	大／自由	小／窮屈
	〔マル〕	〔カド〕

以上の心理テストの言語心理学的解釈の示す重要性は，種としての人間に見られる，ほぼ普遍的現象という点にある。それは，人間の言語機能の本質に係る可能性を示唆するものである。我々は，この結果をプラトンの対話篇クラテュロスのピュセイ説に照合する事にする。

ピュセイ説で問題となっていた音声も実は sonorant vs obstruent に２分されるものであった。sonorant[r, l…], obstruent[t, d…]。そしてこの音声に呼応する意味はそれぞれ前者が「運動，滑らかさ」，後者が「停止」であ

った[11]。この「運動，滑らかさ」対「停止」は「自由」対「窮屈」に置換えうる。またそれは自由度を基準とすると「大」対「小」にも転換しうる。この様に整理してみると，それは，前述の心理テストから出発して得た，言語機能の本質に依拠すると見られる準普遍的現象と一致してくる。即ち外界の印象とそれに対応する音声的現象の共通の特性〔大／自由 vs 小／窮屈〕と同一ということである。ピュセイ説は，提示の方法が比較的幼稚とは言え，その主張の核心部は，現代の心理学，言語学の支持を得る可能性をもつと言えよう。言語機能の必然性の裏付けがあるからこそ，ピュセイ説，音象徴は，時代が変っても絶えず新鮮な刺戟を我々に与えずにはおかないのではないだろうか。確かに音象徴と矛盾する例を挙げる事は容易であるだろう。しかし，通時的パースペクティヴで考察するならば，音声の意味の変化は言語の不可避的宿命である事を知る。この変化により，本来の姿は不透明さを増したり，意味でも逆の意に転ずることもある。ラテン語の veniō「私は来る」ギリシヤ語 bainō「私は行く」は印欧語の同一祖形 *gan 一に還元されるとは比較言語学が教えるところである。この現象は「行く・来る」の意味の基底にある親縁性の枠内の変化と考えられているが[12]，いずれにしてもこの両者は反意語であり，同様な親縁性はあらゆる反意語に共通に見られる。とすると，音象徴によって予想される意味に矛盾する例と言えば，反意語がその最たるケースであるから，それで音象徴を否定する理由にはならない。数という抽象的観念にしても，何らかの具象的な意の転化が媒体となっていないと断定しさる事はできない。それは他の多くの抽象概念を表わす語が，具体的意味の語に由来する事でも主張しうる。更にピュセイ説の分析の方法論的未熟さがあると思われるが，それに就いては後の段階に譲る。

次ぎにもう一つの心理テストの結果を考察し，ピュセイ説の検証を行なう。被験者に mal と mil という2つの表現が与えられ，その意味は双方共に「机」という意味としたところ，80%が mal を「大きな机」，mil を「小さな机」と決定したと言う[13]。両者の音声上の違いは母音の［a］と［i］だけで残りは全く共通である。従って母音［a］が「大」，［i］が「小」というピュセ

イ説の主張を支持することになる。因に筆者も類似のテストを試みたが，結果は 100 % ピュセイ説乃至は size symbolism の存在を支持するものであった。心理テストの方は種々の異なる言語使用者に試みられ，その結果に対しての解釈は，多くの言語において低周波の [a] のような音は「大なるもの」，高周波 [i] のような音は「小なるもの」を表わすと推定されているが[14]，筆者は次の様に考える。周波数の低い音と高い音の聴覚印象は前者が比較的ゆったりした感じであるのに対し，後者は緊張度が高い，すなわち抵抗感がある。そしてそれは「ゆったり→自由」,「抵抗感→窮屈」と置換えられ，sonorant vs obstruent の対立関係に等しい。呼気の視点からみても [a] の音の発音の場合の方が [i] の場合より，妨げられる度合いが少ない。すなわちこの場合も子音 sonorant vs obstruent の場合同様，〔大 vs 小〕の二分法的メルクマールが平行的に認められる。母音 [a] は開母音,[i] は閉母音と呼ばれるが，それは開口度の「大 vs 小」の関係を示す。sonorant, obstruent の場合も，喉頭部の開きの度合いは，前者が「大」，後者が「小」であるが，開母音 vs 閉母音の場合の方が，ノンバーバルコミュニケーションの模倣的機能は強いと思われる。これは，[a] vs [i] が「大」vs「小」と表わす size symbolism として知られ，明らかにその存在が確認されている言語があることからも肯定されうるし，更には，その全体が記号論的に把握されうる文化の基底に模倣性があり，言語はそのモデルとみなされるという点からも充分に考えられる。

さて我々は二項対立を示す子音群 (sonorant vs obstruent)，母音群 (a vs i) の各々に共通のパラメーターとして調音器管の開きの度合い，メルクマールとして「大・小」を設定しうる。すなわち，子音の場合は，喉頭部，母音の場合は口の開きの大・小である。このようにして我々は次の音象徴の統一的シェーマを得ることになる。

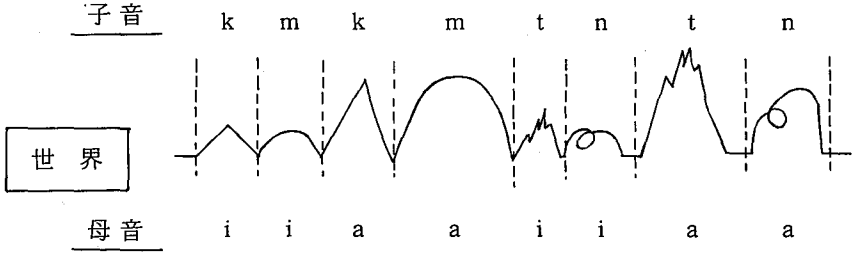
〔表 3〕

sonorant [r, l, m, n]	obstruent [k, t…]
母音 [a]	母音 [i]

{調音器管の開き}	大	小
	‖	‖
視覚印象	大	小
	〔マル〕	〔カド〕

以上の音象徴のシェーマは，心理テストにより，言語の違いと関りなく，種としての人間にほぼ普遍的に存在するものとして確認されている。するとそれは先天的に人間がもつ言語機能の基本構造とも考えられる。それはまた世界の切取りと同時になされる命名という，認識と言語の問題に係ってくる。我々が視覚的に外界の事物を形状的に認識する際のメルクマールは二分法的に「マル」か「カド」であり，同時に「大」か「小」も認識する。上記の音象徴を，世界認識の図形に当てはめると次の様になる。

図 2.



この図形は言語の起源の問題とも係るが，その点は度外視して，次の事が言えるのではないだろうか。

1. 二項対立の子音群は事物の二項対立の形状（マル vs カド）をそれぞれ表わし，二項対立の母音群（a vs i）は事物の二項対立のかさばり（大 vs 小）をそれぞれ表わす。
2. 1の音象徴的表現形式も音声的，意味的変化を蒙る結果，本来の形式が不透明になる場合も生じる。意味の変化では反対語になる事もありう

るが，それは根本的な意味の親縁性によるとも解釈されうる。

3. 一見，音象徴とは係りがないと考えられる数の観念も，他の多くの抽象名詞が示すように具象名詞からの転化の可能性は考えうる。これは広い意味で 2.の意味変化の部類に入る。

3. 音象徴の例：カフィラ語　以上で，ピュセイ説を支持し，かつソクラテスの反証（矛盾の例，数の観念）の反論をなした積りであるが，なおピュセイ説の分析的手法の不備と思われる点を指摘しておきたい。先ずそれに関連して筆者自身が数年調査した一アメリカインディアン言語の例から始めることにする。このカフィラ語（ウト・アステカ語派のショショネアン語族に属する南カリフォルニアに居住するインディアンの言語）の語彙構造には次のような現象が見られる。語根は CVC（子音・母音・子音）と規定される。この両子音の枠が同一で，中間の母音だけが相違する語を集めてみると，基本的意味を共有して，ニュアンスを異にする語が多数ある事に気づく。これは多くの言語に見られる母音交替と呼ばれる現象で珍しくはない。それは英語の sing — sang — sung に見られる様な時制の差異を示すものであったり，ギリシヤ語 lēgō「私は言う」— lògos「言葉」，ラテン語 tegō「私はおおう」— toga「古代ローマ人の外衣」などのような派生関係の品詞であったりする。印欧語では普通 e/o ablaut という様に一定のパターンがある場合を母音交替と呼ぶ。日本語の場合も，規則性の有無は別として古語辞典類には母音交替の例が指摘されている[15]。koto「言」，kataru「語」などは kuti「口」からの派生という説もある[16]。厳密な意味の母音交替には一定の型の規則性が見出されなければならないので，カフィラ語の場合，広義の意味に用いる事にする。このような CVC の子音枠を共有する母音交替的グループを集め，グループ間の比較をすると次の事象に気付かされる。

第 2 子音が共通な諸グループ間には，ある基本的な意味の共通性が見出される。例えば第 2 子音が同一のグループ（第 1 子音は異なる）に共通な意味上の素性として，〔回転〕，あるグループには〔集積〕，また他のものには〔揺れ〕という風にである。更に第 2 子音を sonorant と obstruent に分類する

と，前者には「回転」，「集積」，「揺れ」，「包む」の意味素性が見られるのに対し，後者の場合，「切断」，「殴打」，「衝突」などを示すものが統計的に多く見られる。この二者間にはある種の対立関係が読取れる。すなわち前者の，共鳴音を第2子音に共有する語群に対し，後者の，阻害音を第2子音に共有する語群の「動き」には衝撃性が認められる。前者の「動き」には，それに比べれば，激しさは無い。それは「ゆるやかさ」vs「激しさ」の対立とも把握しうる。obstruent の類いは stop あるいは plosive「破裂音」とも呼ばれる。それは，一旦停止に伴なう呼気の激しい噴出のためである。「なぐる，ける」などの運動には，激しい衝撃があるが，それには plosive, stop が有する「急激な停止と激しい動き」と共通とみられる。筆者は，カフィラ語における，この基準による語彙表を作成したことがある[17]。日本語について同様な分類は試みた事はないが，第2子音が sonorant であるグループを部分的に作ってみるとカフィラ語と共通な現象が見られるようである。

〔表4〕

（A—1）（擬態語）

k—r		
a	カラカラ→刈ル，駆ル	「回転」[18]
i	キリキリ→錐	
u	クルクル→クルマ クルム	
e		
o	コロコロ→コロ コロガル	

（A—2）（擬態語）

t—r		
a	タラタラ→垂ル	「連」
i	チリチリ→散ル？	
u	ツルツル→連ル，釣ル	
e	デレデレ	
o	トロトロ→トロロ	

（B—1）

k—m		
	→{交ム 噛ム	「組・合」
a		
i	→キメ，コム	
u	→組ム	
e		
o	→込ム，混ル	

（B—2）

t—m		
a	→蓄ム	「積」
i		
u	→積ム，妻	
e		
o	→富ム，伴・反	

日本語の場合，体系的に調べていないので厳密さからは程遠いが，ある種の傾向は指摘できるのではないだろうか。それは次の点である。

1. 両子音を共有する語群には母音は変っても，ある共通の意味が認められる（「回転」,「組・合」…）。
2. 第2子音を共有する場合（A－1，A－2グループ，B－1，B－2グループ），第1子音を共有する場合より（A－1，B－1など），各々の共通の意味に近似性が認められる。
   （A）「回転」,「連」：一連の連続運動
   （B）「組・合」,「積」：集積
3. 2より推論される事は，母音交替的グループの共通の意味形成には第2子音が決定的要因である。

カフィラ語に認められる音象徴の語彙グループに類似の傾向が，日本語にも見られる事を指摘した積りだが，図2で示したように，心理テストに基く，言語能力の普遍的メカニズムがあるとすれば，類似性は異とするに足らない。これに関してピュセイ説も同様である。ただ，カフィラ語と日本語（調査は極めて不完全だが）の場合，語根の第2子音が，決定的要因であるのは何故か。主語—述語という陳述の二大要素の語順の原型が示されているのかという憶測は避けるが，語根内の一定の位置づけという枠組みが，分析，体系化には必要と思われる。クラテュロスのピュセイ説にはこの分析的手続きが欠けるため説得力が足りないと思われる。この枠組みは開母音［a］,閉母音［i］が示す可能性のある size symbolism の発見にも前提条件である。例えば，日本語の場合A－1，k－r，で kar-u（刈る）運動の回転と kir-i（錐モミ），キリキリ舞イ）的運動の回転の差異に大小の違いが認められるかなどの細い統計的調査（通時的なものも含め）にとり，枠組は必要であろう。このように見ると size symbolism の反証として big vs small を持出すことの短絡性は明らかである。

最後に，音象徴の普遍的メルクマールが，文化の他の重要な諸相にも現れる事を指摘しその客観妥当性の傍証とする。

4. 民俗象徴に見られる音象徴との類似性　文化そのものは記号論的に把握され，言語記号が，そのモデルと見做されうる。また文化の核心的要素として民俗があげられる。ここで厳密な概念規定は避けるが，民俗とは民族の世界観，信仰，神話，伝承が集約され，常民レベルにおいて習俗，民俗語彙などに具現されたものとも言えよう。いずれにしても民俗象徴も記号としての機能を持っている。

筆者はある複数民俗の比較を通じて（日本，ドイツ）次のような共通のメルクマールをえた[19]。

1. 両民俗に共通の背景として太陽信仰があり，それは昼／明を支配するものとして，夜／暗の月と対置される。
2. 太陽に対置する月は，満月をもって，太陽はその光りをもって典型的特性とし，満月はマル○，太陽の光りはカド△がメルクマールとして意識される。
3. 2項対立を示す陰陽の満月 vs 陽光にはその属性を示す，動物，植物，魚類がシンボルとして現れるが，各々が満月 vs 陽光の対立するメルクマールを示す一対として登場する。
4. 以上の二分法的メルクマールの○ vs △と平行的に大 vs 小のメルクマールが見出される。

比較民俗によりえられた二分法的共通項を以下列挙してみる。

〔表5〕

項目	満月	vs	陽光
	夜／陰／水	〃	昼／陽／火
	狸（穴熊）	〃	狐
	鶯	〃	時鳥（郭公）
	梅（桜）	〃	橘（松）
	大クジラ	〃	小クジラ（イルカ）
	赤魚	〃	青魚

メルクマール
- 形
  - マル　vs　カド
  - ○　〃　△
- カサ　大　〃　小

表5にまとめられた，民俗上の二分法的象徴とそれが有するメルクマール○／大 vs △／小の二項対立関係は，表3の音象徴のそれと平行的である。これは一体，何を物語るのであろうか，筆者は次のように考える。表3の音象徴は，図2で示した如く，世界の切り取り，すなわちその認知に直接関与するものである。そこには種としての人間のもつ世界認識のパターンの共通の原型が示されている。そこには同時に，文化記号のモデルとしての言語の原型もあると考えられる。表5の民俗的象徴には民族の信仰，世界観（世界の切りとり方と関連）が投影されており，それはまた文化記号の核心的部分でもある。従って，ここに世界認識の基本的シェーマが存在して当然であり，また同一文化体系の成立に不可欠の整合性のためにも必要条件と考える。逆に民俗との整合性の故に，音象徴の客観妥当性はより保証されたといえる。

む　す　び

音象徴としてのピュセイ説を取上げるならば，当然，対立命題のテセイ説（契約説）に言及しなければ片手落ちとの非難を受けるかも知れない。しかし，本稿の目的は，音象徴の存在を，言語，心理，認識，民俗の諸相から多角的に模索することにあり，その手がかりとして，音象徴の古典と目されるピュセイ説を取上げたのである。勿論，ピュセイ説を強化すれば，アンティテーゼは影がうすくなるのは理の当然である。

カフィラ語における音象徴も内容的により詳細に論ずべきであったし，日本語の例など不備，舌足らずの憾を残しており，いずれ稿を改めてする積りである。ただ，特に今世紀に入ってからの言語学の領域で，タブー視されてきた言語の起源の問題ともからんで，ほとんど無視されてきた感の音象徴が，学際的関心の対象となるための一刺戟に資するならば幸いである。

注

1） 丸山圭三郎：ソシュールを読む　178，196，222頁参照。

2） プラトン：クラテュロス　64頁。

3） 渡部昇一：言語と民族の起源について　262頁参照。

4） プラトン　122頁以下。

5） Ibid. 130頁以下。

6） Ibid. 132頁。

7） Ibid. 131頁。「細かなもの」となっている。

8） Ibid. 146頁以下。

9） W. Köhler: Gestalt psychology. or Bußmann: Lexikon der Sprachwissenschaft. Lautsymbolik の項。

10） Chomsky, N. et al: The sound pattern of English. 302頁。

11） プラトン　131頁参照。ここでは全ての obstruent が「停止」を表わすとされているのではなく，例えば，ph, ps, s, z の様な閉鎖，破擦，摩擦音などの obstruent は一般に「震動」を表わすとなっているが，それは「強い気息を伴って発音される」とあるように，呼気が極端に狭くなった調音器管を通過する際の激しい運動からの類推で，[r] 音の運動とは質を異にする。

12） W. B. Lockwood: 比較言語学入門　229頁。

13） E. Sapir: A study in phonetic symbolism.

14） Bußmann Lautsymbolik の項。

15） 岩波古語辞典　11～12頁「母音交替」の欄では，日本語における a — ö の型が指摘されている。

16） 広辞苑「言」の項。

17） この語彙表については，Cahuilla dictionary p. 2 の introduction で述べられている。

18） 刈ル，駆ルをこのグループに入れたのは次の考えによる。karu 刈ル，kiru 伐ル，kuru 刳ル（えぐって穴をあける），koru 樵ル（木を伐る）に共通な意義素は，単なる切断でなく，動作に伴う，腕乃至は刀物の回転運動に基く結果を表わすと考える。それは，「イチゴガリ」，「駆り立てる」あるいは「稲刈り」に観察されるような，腕を円形，半円形に拡げて，回転運動に準じる動きで求心的運動が意識されると解釈するからである。

19） 日置孝次郎：「時鳥・鶯について—民俗・言語学的—考察」，「鰊・鯖の比較民俗・言語学的—考察」。

参 考 文 献

Bußmann, H. : Lexikon der Sprachwissenschaft. Stuttgart: Kröner 1983.

Chomsky, N., Halle, M. : The sound pattern of English. New York: Harper & Row 1968.

日置孝次郎：「時鳥と鶯について－民俗・言語学的一考察」in: アルテスリベラリス第23号。

日置孝次郎：「鰊・鯖の比較民俗・言語学的一考察」in: アルテスリベラリス第35号。

Köhler, W. : Gestalt psychology. New York. 1947.

Lockwood, W. B.(永野芳郎訳)：比較言語学入門。大修館書店　1978（第2版)。

丸山圭三郎：ソシュールを読む。岩波書店　1984（第4版)。

大野晋他編：岩波古語辞典。岩波書店　1974。

Platon（水地，田中訳)：クラテュロス，テイアイテスト（プラトン全集2)。岩波書店　1974。

Sapir, E. : „A study in phonetic symbolism". in: Journal of experimenal psychology 12. 1929.

Seiler, H. & Hioki, K. : Cahuilla Dictionary. Banning, Calif. : Malki Museum Press. 1979.

渡辺昇一：言語と民族の起源について。大修館書店　1978（第5版)。

（筆者　岩手大学人文社会科学部教授)

本稿は昭和60年度科学研究費（総合研究A，「テクスト分析の研究」，代表　脇阪豊）の補助を受けて行なわれた研究の一部である。